今月の視点－145　　2019 年度入試　英語外部検定利用状況

【推薦・AO 編】
英語外部検定は今年も利用拡大

英検の採用率は 98％超え！

旺文社　教育情報センター　2019 年 1 月 7 日

大きな教育改革のうねりのなか、2021 年度（2020 年度実施の入試）から大学入試が大きく変わる。現行の大学入試センター試験が廃止となり、大学入学共通テストに移行され、国語や数学では記述式が導入される。英語においては大学入試全般でこれまでの「読む」「聞く」に加え「話す」「書く」を合わせた 4 技能を評価対象とする英語外部検定（以下　外検）の利用が推し進められている。

こうした英語入試の改革が迫るなか、2019 年度の推薦・AO において、各大学がどのように外検を利用したのか、推薦・AO を実施する大学の募集要項をすべて調査し、外検の利用状況を分析した。

外検の利用大学数は 4 年連続増加も
全体の大学数で見るとまだ過半数に届かず

2019 年度入試の推薦・AO において外検を利用している大学は全国 768 大学[1]のうち 352 大学（全体の 45.8％）あることがわかった。前年の 335 大学から増加となり、2016 年の調査開始以降 4 年連続の増加となった。今後の大学入試改革の流れを考えれば、増加は想定通りの結果と言えるだろう。

なお、推薦・AO では、一般入試でいわゆる外部検定利用入試がスタートした 2015 年度よりもずっと以前から資格取得者に対する優遇措置が取られている。本調査では、そうした資格全般の 1 つとして英語の外検が含まれている場合も、外検利用校としてカウントしている。

設置者別の利用状況は以下の通りで、国立大・私立大は半数の大学が採用している一方で公立大はまだ 20％台となっている。国立大・公立大・私立大すべてで前年よりも利用校数

[1] 2019 年 4 月入学者の学生募集を行った大学。また新設の専門職大学 2 大学、および文部科学省所管外の大学校のうち、学士の取れる 7 校は数に含めた。通信制のみの大学は除く。

(C)2019 旺文社 教育情報センター

は増加しているものの、全体の利用校数を見ればまだ過半数に届かない状況だ。とはいえ、今後の英語入試改革の進展を考えると、外検を利用する大学は今後も増えていくだろう。表1では2019年入試の推薦・AOで新たに外検を取り入れた主な大学を載せた。

▼設置者別の外検利用状況（対象入試：2019年度入試の推薦・AO）

国立大学　：　41大学　（全国立大学82大学のうち）／　利用率50.0%
公立大学　：　25大学　（全公立大学90大学のうち）／　利用率27.8%
私立大学　：　286大学（全私立大学587大学のうち）／　利用率48.7%
全　　体　：　352大学　　（全国768大学のうち）／　利用率45.8%

▼表1：外検を推薦・AOに取り入れた主な大学

大学名	学部・学科名	入試種別・入試名	利用方法
(国立)群馬大学	社会情報学部 GFL特別枠	推薦	出願資格
	理工学部 GFL特別枠		
(国立)東京外国語大学	言語文化学部	推薦	出願資格
	国際社会学部		
	国際日本学部		
(国立)東京工業大学	環境・社会理工学院(融合理工学系)	AO	判定優遇
(公立)高崎経済大学	経済学部	推薦(英語重視推薦)	出願資格、加点
(私立)札幌学院大学	心理学部	推薦(公募制総合)	得点換算(課外活動点)
	人文学部		
	法学部		
	経済学部		
	経営学部		
(私立)東北公益文科大学	公益学部	推薦(公募制)	出願資格
(私立)桐生大学	医療保健学部	AO	判定優遇(面接時)
(私立)川村学園女子大学	文学部	推薦(公募制)	出願資格、加点
	教育学部		
	生活創造学部		
(私立)芝浦工業大学	工学部(機械工学科を含む4学科)	推薦(公募制[女子])	出願資格
(私立)金城学院大学	文学部(英語英米文化学科)	推薦(資格・面接型)	出願資格
(私立)常磐会学園大学	国際こども教育学部	推薦(手続き優遇入試)	加点
(私立)関西福祉大学	社会福祉学部	推薦	得点換算
	教育学部		
	看護学部		
(私立)広島文教大学 ※	教育学部	推薦(外部英語検定重視型)	得点換算
	人間科学部		

※現・広島文教女子大学。2019年4月、名称変更予定。

(C)2019 旺文社 教育情報センター

推薦・AO で利用できる外検は「英検」が 98.6%と圧倒的！
採用増加率で見ると「TEAP CBT」が最大で、約 10%アップ！

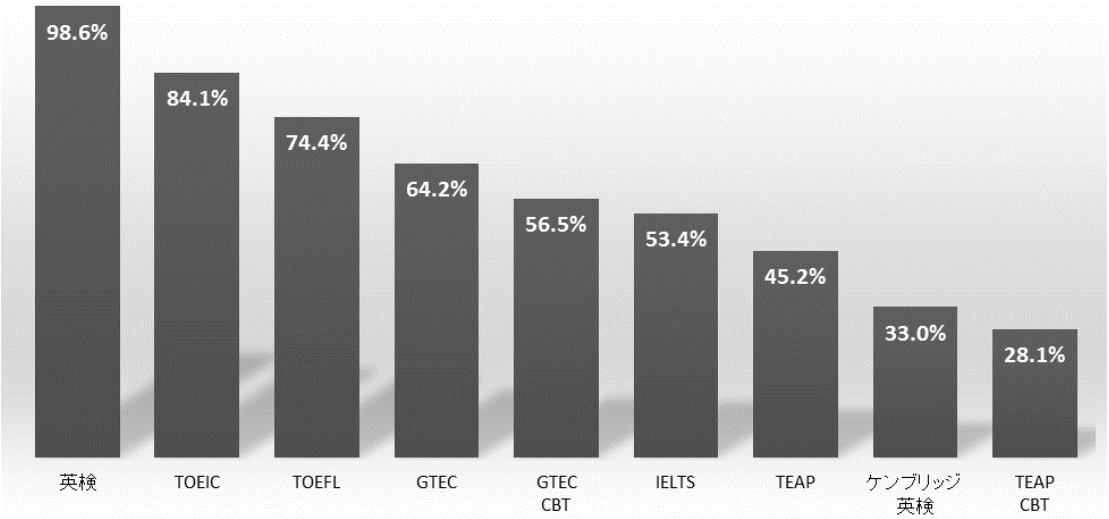
推薦・AO で外検を利用できる 352 大学の募集要項から、各外検が利用できる割合（＝採用率）をまとめた。下図 1 をご覧いただきたい。採用率では英検が約 99%と圧倒的で、ほとんどの大学の推薦・AO で利用できることが分かる。採用増加率で見ると TEAP CBT が最大で、前年の 18.6%から約 10%アップと大きく躍進した。

英検がここまで高い採用率を誇る背景として考えられるのは、まずは受検者の規模だ。英検は、2017 年度の 1 年間に全年代合計で約 360 万人、今後大学の受験生になりうる中高生に限定しても約 280 万人も受検をしている。もちろん受検者数では国内最大の英語検定だ。

大学としては、志願者の確保を考えるため、まずは受検者数が一番多い英検を採用していると考えられる。また各大学の過去の入試結果からも、実際に受験生が利用した外検として最も利用されたのが英検という調査結果も出ているケースが多く、英検を採用することで大学側が考える志願者の確保という目的を果たしていると言える。

また英検は、2015 年度より、それ以前の級の合否だけの評価から、スコア（英検 CSE）での評価も導入した。スコアが加わったことにより、CEFR と対照できるようになり、自分の実力をより詳細に客観的に把握できるようになったことも受検者にとっては大きいだろう。大学側もこうした変化に対応し、英検の受検者には級だけではなくスコア提出を必須とするケースも出てきている。

▼図 1：2019 年度入試の推薦・AO における外検の採用率



※TOEIC は TOIEC LR と LRSW、TOEFL は iBT と JC、GTEC は 3 技能と 4 技能、TEAP は 2 技能と 4 技能を合算し算出。

※各検定の採用については募集要項に記載されている検定をすべて計上。「それに準ずる検定でも利用可」のような記載の場合は、上記すべての検定が採用されているとしてカウント。募集要項の文面から記載検定以外が有効と読み取れない場合には採用としていない。

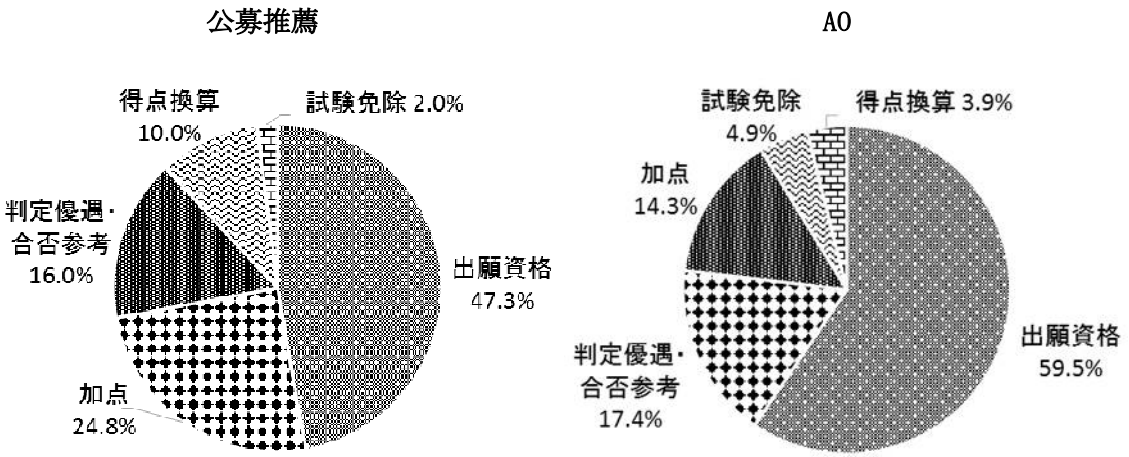
(C)2019 旺文社 教育情報センター

利用方法は推薦・AO ともに「出願資格」が最多。
学力担保としての利用か

ここまで推薦・AO での外検利用の増加や各検定の採用率を見てきたが、ここでは外検の利用方法についてまとめた。下図 2 をご覧いただくとわかるが、推薦・AO ともに「出願資格」がもっとも多い。この傾向は過去の調査でも同じだ。

学力不問と揶揄される一部の推薦・AO に対する改善策として、現在は文部科学省の方針により推薦・AO でも学力を担保することが求められている。そうした背景から、外検の級やスコアを出願資格として課すことで学力担保を図る大学が多いと考えられる。特に AO はその傾向が強く、推薦よりも出願資格の割合が高いことが分かる。

▼図 2：推薦・AO における外検の利用方法



推薦・AO で求められる英語レベルは、
CEFR の A2～B1 レベルが全体の約 80%！

つぎに推薦・AO で求められる外検のレベルを見てみよう。ここでは採用率約 99%の英検を対象とし、各入試で設定されている級と CSE を CEFR にあてはめて算出した。それが図 3 の円グラフだ（CEFR は 2018 年 3 月文部科学省公表の新 CEFR）。

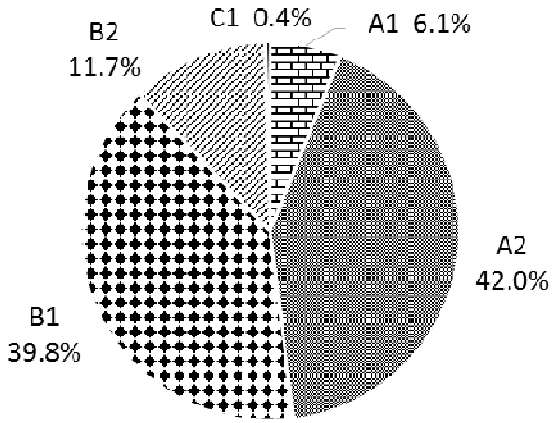
A2 が約 42%、B1 が約 40%と英検でいう準 2 級・2 級レベルが全体の約 80%を占める結果となった。これは過去の結果と概ね変わりない。

英検準 2 級～2 級レベルが文部科学省の掲げる高卒時の目標英語力となっていることを考えると、学力担保としての外検利用が多い推薦・AO で、このレベル帯が最も多いことは妥当な結果と言えるだろう。

(C)2019 旺文社 教育情報センター

2018 年 6 月に国立大学協会が示した入試改革での新入試における外検の利用方法の参考例も、レベルの設定に影響を与えているだろう。そのなかで、具体的な設定は各大学・学部が主体的に定めるとしながらも、一般入試では「CEFR 対照表に基づき、一定水準（例えば A2）以上を受験資格とすることが考えられる」として、A2 が出願資格の参考例として示されたのだ。こうした背景を踏まえると、今後もこの A2 レベルが 1 つの大きな基準となることが想定される。

▼図 3：外検を利用する推薦・AO で求められる英語レベル（CEFR 換算）



＜参考＞		
A1	≒	3級
A2	≒	準2級
B1	≒	2級
B2	≒	準1級
C1	≒	1級

※外検の級･スコアが段階的に利用される場合、もっともやさしいレベルのみを集計。

学問系統別の外検利用を調査！
文系・理系ともに外検が利用できる推薦・AO は増加！

最後に推薦・AO で外検を利用できる入試を 18 の学問系統別に分析した。図 4 をご覧いただきたい。理系よりも文系の学科の方が外検を利用できる入試が多いのは明らかだが、医学や歯学、そして薬学などはそもそもの学科数が他の学問系統に比べ少ないので、その点には留意してほしい。

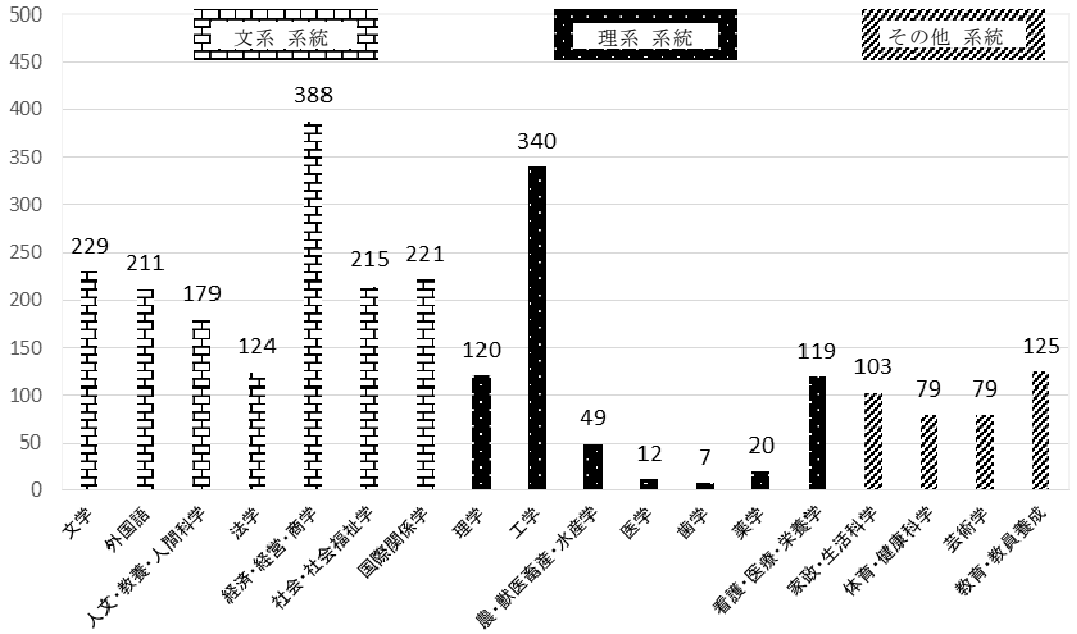
そのうえで、一番多いのが文系の「経済・経営・商学」の 388 入試で、次に理系の「工学」の 340 入試だった。

次に、表 2 にて 18 の学問系統のなかでも増加数が多かった系統も調べた。増加数が一番多かったのは理系の「工学」で前年に比べ 31 も増加した。続いて文系の「経済・経営・商学」で増加数は 24 だった。

利用入試数の多い「経済・経営・商学」と「工学」が目立つが、全体的に外検の利用は増加傾向にある。これからのさらなる英語入試改革の進展に伴い、すべての学問系統で今後も増加傾向が続くだろう。

(C)2019 旺文社 教育情報センター

▼図 4：学問系統別 推薦・AO における外検利用入試数



※学問系統は螢雪時代 4 月臨時増刊における各大学からのアンケート回答に沿って分類。
※原則、集計は「1 学科 1 入試＝1」で計上。1 入試の中で方式が細かく設定されている場合(A,B,C 方式など)は、まとめて「1」で計上。
※学問系統が複数にまたがる場合、両系統に計上（例：国際経営学→「経済・経営・商学」「国際関係学」系統の両方に計上)。

▼表 2：学問系統別の入試増加数 TOP10

no,	学問分野	2018年度入試	2019年度入試	増加数
1	工学	309	340	31
2	経済・経営・商学	364	388	24
3	社会・社会福祉学	196	215	19
4	看護・医療・栄養学	101	119	18
5	文学	212	229	17
6	教育・教員養成	109	125	16
7	国際関係学	208	221	13
8	外国語	200	211	11
9	人文・教養・人間科学	169	179	10
10	家政・生活科学	95	103	8

(C)2019 旺文社 教育情報センター